

「淘汰された命」の延長線上に、今を生きている障害者の生がある

自立生活センター・東大和 理事長 海老原宏美さんのお話をきいて

心療内科医 今崎牧生

相模原市で起きたこの事件に関して、学識者、障害当事者団体などから多くの見解とメッセージが寄せられている。その最前線にいるゆきさんが、最後に胸を詰まらせながら「今日のお話が一番納得がいった」と仰った。全く同じ思いでした。

自分は四肢麻痺の頸椎損傷 C5 です。海老原さんとほぼ同じように、入れ替わり自薦の介助者に来てもらう生活を送っています。

時々人前で話す機会がありますが、あの事件以後、事件の事と出生前診断の事については必ず触れ、フロアにもマイクを回すようにしています。

「言葉を持たない」「意思を持たない」という表現は周囲の無理解と思い込みによって勝手に作られた状態像であって、自分の経験上、知的に相当低いと言われている人であってもよくよくみると、必ず色々な事を伝えています。また、AAC（代替コミュニケーション）などのツールを使うことにより、豊かな内面世界が伝わってくることもあります。

自分がお話するときは、どちらかといえばコミュニケーションというものが双方向性である以上、障害の問題だけでなく、周囲の人々が「自分たちの問題でもある」と気付いてもらえるよう促すようにしていました。そこから「生」の発する豊かさに気がついてもらいたいとの想いから話します。

しかし、海老原さんのお話は、もっと大きな視点、「価値」についてとても分かりやすい例を提示しながら、人間の集団は常に自分より弱い立場ものを作り出していかなければ成立しないという、統治された集団の性質や、人が捕らわれて離れることのできない優劣感情や差別という「業」までをもスカーンと吹き飛ばしてしまうような歯切れのよいもので、誰もが納得してしまう強い説得力がありました。

これは理屈やロジックを超えた「ある一つの境地」なのだと感じました。

障害者運動が、障害児を自らの手で殺めてしまった母親を減刑にすべしとの世論に反対し、その勢いを強めた事を思い起こされます。しかし、出生前診断で人為的に決められた週数以内であれば墮胎することが圧倒的多勢である現状は、そのことを議論するまでもなくコンセンサスとしているのでしょう。

「淘汰された命」の延長線上に今を生きている障害者の生があるなら、自分達の「生」に対する危機感と脆さを感じずにはいられません。

最近徐々に悪化していく障害に加え、加齢が進行している体を抱えやっかいですが、今回、このように晴れ晴れとした気持ちにさせられた、とても素晴らしい講義を有難うございました。これからも力強いメッセージを発信し続けられることを応援させて下さい。